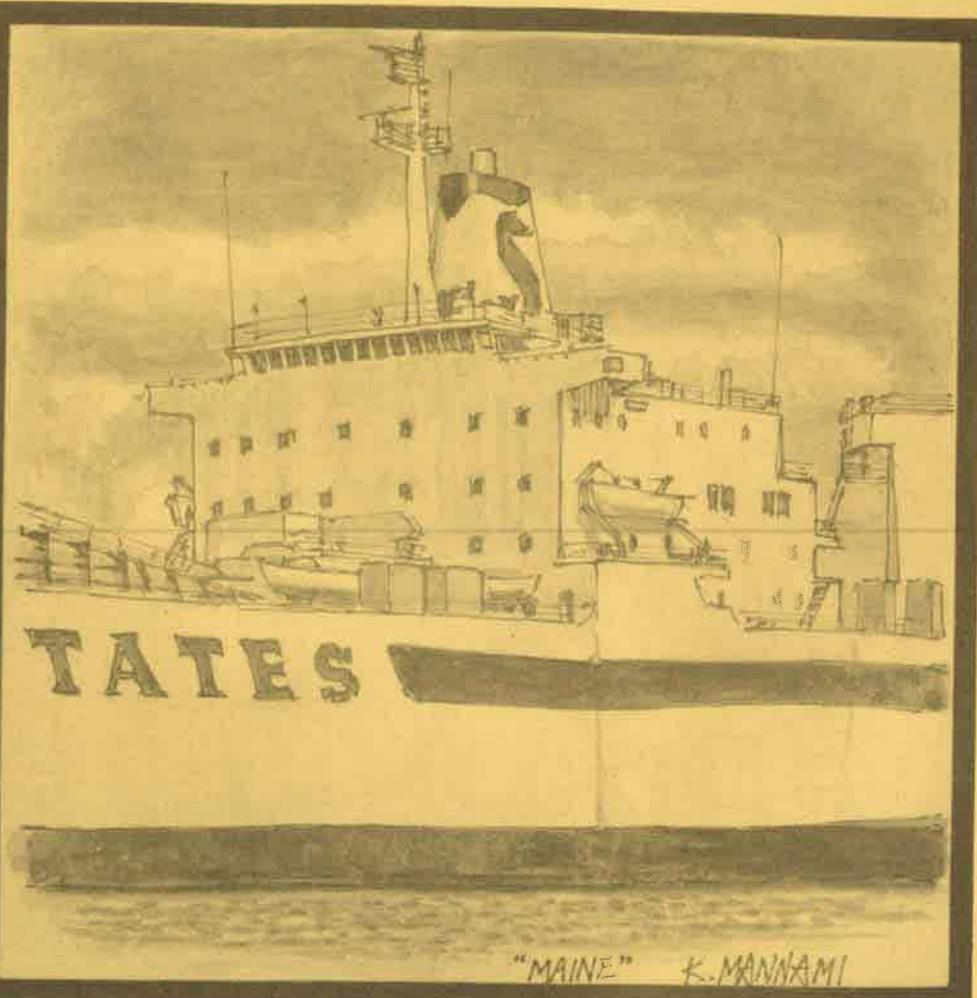


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



第11号

海文堂書店 1982・12 [11]

〒650 神戸市中央区元町通 3-5-10
(電)

目

次

鬼形の清少納言	木山 蕃	2
丹波立杭への道	島崎直代	5
港と船と錨と	海老原明美	8
メリケン波止場（上）	角本稔	12
神戸野球物語④	棚田真輔	17
ぶつく・えんど		22
郷土誌の窓		24
		31

鬼形の清少納言

—「古事談」の鬼—

木山 蕃

古典の中に鬼を索めようと購つて来た、古書臭紛々たる明治三四年版「国史大系」で「古事談」を開く。

冒頭、王道后宮は称徳天皇、道鏡ノ陰ヲナオ不足ニオボシメシテ、薯蕷ヲモツテ陰形ヲ作り、コレヲ用イラレタモウノ間、折レ筆リ云々と漢文体ではじまる。外国語の読解力をつけるために、原書の艶本を勧めた先達の文章を思い出した。レ点、一・二・三とたどり、「薯蕷」。肥後も薩摩も有名は後世のことだから、山の芋と見当をつけ、「本草和名」に當る。ある、ある、「也未都以毛」。このように興に任せてあちこち調べ出すと際限なく枝分れし、本幹を見失いそう。いずれにせよ、原著者の苦労を思えば調べる手間は厭えない。

文章の書出しを著者が腐心する話は多いが、王道后宮、

僧行、勇士、神社仏寺、亭宅諸道の六部に部立てしたうえで、この一文から書出した作者の意図は何だつたろう。冒頭のこの話には「靈狐」も登場するが、それはさておき、鬼の文字を追つてページを繰ると、一條攝政と政争の朝成郷の旧宅に所謂鬼殿歟の注釈が見え、清少納言零落之後が見当る。

清少の話は、若殿上人たちが彼女の宅体破壊シタルヲミテ、少納言無下ニコソ成ニケレト車中ニ云々聞いた清少が、馬を好み骨を買った燕王の故事を踏まえ、駿馬之骨ヲ不買ヤアリンとやりかえす話であり、その時の清少は女法師であることを自らの女性で証立てしている。

ババオニといふのは、兵庫県下の鬼会でもあちこちに

登場する。明王寺、転法輪寺では太郎、次郎、ババの三匹の親鬼であるが、青鬼のババは鬼面の構造から視界の利かない故もあって、躍りのときは、内外陣の結界沿いの尼の顔と読んでも、頭を丸めた鬼の顔とはなろう。本文の少しあとにも、為尼之由云エントテ忽出開と、清少は女法師であることを自らの女性で証立てしている。

に矛をついてゆつくり横へ歩ぐのみ。これを「ババは女神のお伊勢さんの化身で三鬼のうちで一番エライ。昔からエライ人は動かんもんや」と、にんまり世話役さんが解説してくれたものだつた。

もちろんこの青鬼面、忿怒醜惡の相で角を生やし牙をむき、動物の耳をもつてゐる。

鬼形ということばは、あと二ヶ所に用いられていて、臣節編、清水の師僧が、参詣の進命婦という女房を見て欲心を発し、忽ち病んで三ヶ年不食病となり死門に及ぼうとするとき、その病因を打明けた。弟子からその由を告げられた女房は早速に病室にやつて来るが、そのくだり、師僧の病者頭を刺(剝)ラズ年月ヲ送ルノ間、髪已ニ銀針ノ如ク、其貌鬼形ニ異ラズとある。

いまひとつは勇士編、懺悔の心がなく悪趣に墮ちた源義家の話で、義家朝臣病惱ノ時家ノ向ナリケル女房ノ夢う。

二、地獄絵ニ画タル様ナル鬼形の輩が乱入して義家を捕え、大札の銘に無間地獄の罪人源義家と書かれている様を見、後朝問合せるところの晩に義家が逝去していたとい

後者の鬼形が獄卒を指しているのは明らかで、角・牙を生やし鋭い爪をもつた裸体禪姿が思われ、牛頭・馬頭などいわゆる地獄の鬼である。

これに対して前者は、長患いで文字どおり坊主頭に髪の毛が銀針のよう伸び、顔付が鬼のようだといふ。銀針は鍼のそれを指すのであろうが、それとして寸法には種々あるよう、長い針が頭上に密植されている様なら、獄卒の鬼の逆髪を偲ばせはする。しかし、老僧の頭に生え揃わない縫針程度の白髪を想像すると、鬼形はぐんと弱々しくなる。例えは今昔物語がえがく鬼の面貌、目ハ鉗ヲ入レタルガ如クシテ、口広ク開テ、鉗ノ如クナル歯生タリ、上下ニ牙ヲ食ヒ出シタリ云々と比しても、銀針の髪の毛だけでは不足であり、今昔では頭ハ禿也の鬼も居てヘアスタイル一定しておらず、逆髪が要件というわけでもない。

さらに清少の場合は、老いさらばえた女法師であり、虎の皮の禪をメ込んでいては「忽」に「出開」とはいかない、というのは余談だが、猛々しい地獄の鬼の形相と

はほど遠い。

この師僧、清少の例の鬼形は、亡者さらには餓鬼に連なる死者の姿と解すべきだ。

わたしは、日本の鬼の属性を別注の四項目に考えるが、その祖先靈などの靈物の形態として一番身近かなものは、老死者の姿であろう。

(注) 「おに」と呼ばれたかどうかも分らない遠い世、日本人が生成した鬼の主たる属性を、①祖先靈など威力をもつた靈物であり、神聖な畏怖すべきもの。②他界から年や季節の変り目に一時的にやって来る、(威力を畏怖して)帰つてもらうべきもの。③土地の精靈などを踏みつけ豊作の誓約をさせたり予祝をする、福をもたらすもの。さらに④(その威力の依代などで)境界の塞をし、魔除けをするもの。以上の三ないし四項目の属性が根源的なものであると考えているのである。

——拙稿「義と魂」——

属性から考えれば、具体的なイメージから死者とは懸隔のある地獄の鬼も、他界のもの、威力あるものであり、授福の属性は閻魔王は地蔵菩薩の化身という論理をあて

丹波立杭への道 —夏の終りの拾いもの—

(文学Uの会会員)

島崎直代

捨いものであることなど滅多にない。失くしたり、捨てたりすることの方がはるかに多い。旅にしてもそうである。

心の憂さが重くなり、それを捨てにゆく感傷旅行のような旅が、私の場合はほとんどだった。

M先生の後について歩くと捨いものをする。「何を」かはわからないが、そう思つてゐる。

夏の終り、「丹波立杭への道」を歩く日帰りの旅に加えていただいた。

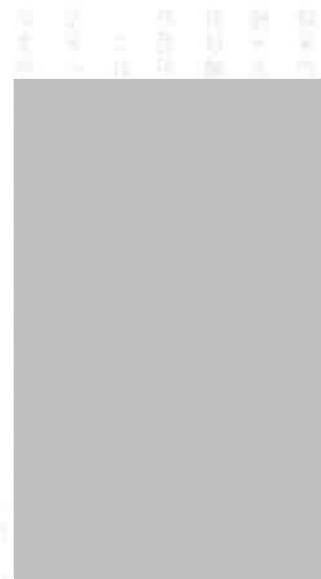
神戸電鉄の三田駅から、国鉄福知山線に乗る。列車の中で、それぞれの旅の仕方を物語る装いの七人が揃つた。

「あつ、あれ。」同行のAさんの、少し驚いたような声に促され、車窓に目をやつた。黒く塗られた「信号機のテコ」が十本並んでいるのがみえた。

はめればよい。(現在だつて一般に裁判官や(鬼)検事、(鬼)刑事が悪者ではない。

死者ないし亡者と地獄の獄卒の二者を一語に表記する

「古事談」の「鬼形」の語は、日本の鬼の生成過程を反映しているといえよう。



線路は、上り下りが並んでいるのが普通だと思い込んでいる。単線に乗ることはほとんどない。街の中に住む

Aさんにも私にも、「信号機のテコ」はものめずらしい。二人は、大げさなくらい、心を踊らせた。広野駅である。降りたのは、三田駅から三つめの藍本駅だった。この藍本駅の改札を出ると、広場の一角に、「摂丹境駅路の遺跡」と書かれた標柱が立っている。その中に、『紅燈籠』と絃歌のたえることなく栄えた宿場のあつたところと説明がなされている。

江戸時代、福知山線道場と並ぶ、ここは、宿場町だったそうである。遊女屋が並んでいたらしい。今も、当時の屋号が残つてゐるという。

駅前から、道を左にとる。この道をくらがり街道と呼ぶ。草木おい茂る、昼なお暗い道を想像していた。くらがり街道の名が、そこからついたのかもしれないと思つていたが、そうではなかつた。大坂街道の別名である。酒をつくる丹波杜氏達が、灘五郷へ出嫁ぎに行く時ここで通つて六甲越えをしたのだという。朝は暗いうちに出発し、夜暗くなつて帰るのでこの名がついたという。

先人達のつけた異称には、何か深い意味があるよう思えてならない。大雑把につけられた名称の中に、きれいな名やら、恐い名前の所があつて、たどると、当時の人びとの暮らしをうかがえることがある。

くらがり街道を相野の方へ引き返すよう五分程歩くと、右手に神社の鳥居がみえる。

貞観年間（八五九～七七）、スサノヲノミコトのお告げで、この神社の香氣高くしたたる水を飲み、流行している疫病を逃れたという酒垂神社さかたれじんじゃである。

立ち止まつてひと呼吸をおいた。蟬の声が降つていて、目の遠くに田んぼが続いている。

田は、千鳥制になつていて、一町一坪として、角地から六の坪まで数え、七からは、また角地へ戻つて数える。それが三十六坪（六町平方）で、一里になる。

「条里制は、この地の方が、奈良よりも早かつたのです。」と、土地の人は言う。

田んぼの中に石の鳥居がみえる。酒垂神社の、表の鳥居である。これは石質が良く、県の文化財に指定されている。

本神の鳥居をくぐり、階段を上ると一体の座像に出会う。武神か、あるいは、左大臣、右大臣の役目で、本神をお守りしているらしい。木彫で、塗りが施されていたようだが、ほとんど落ちており、その装束はわからない。目だけがはつきり見開かれている。

本神を挟んで、左に金平社、蛭子社、右に大歳社、総領社とある。このひとつ、総領社にも何か、言い伝えられる話がありそうだ。

七人は、三本峠を越えて、丹波焼のふる里、上立杭へ入る予定であった。

酒垂神社を経て、くらがり街道を歩く、左に見ていた線路が、いつの間にか右手の方へきていて。またいで山へ入つた。湿地で、足もとが悪い。松茸の山だそうである。木の枝が道を阻む。

山を歩き慣れたTさんが、先の山道を予測したのか、首にタオルをしつかりと巻いた。山に不慣れな私はまねをする。先を歩く人が紅いビニールテープで木の枝に目印をつけてゆく。後を歩く者は、ただ、ただ、「この道だ。」という小気味良い三本峠発見、の声を待つていて。

なかなか、思う言葉は聞かれない。慰さめるつもりもないだろう、木の枝が頭を顔を撫でる。払いのけようとすると、ひっかく。

山の頂上らしき場所に辿り着いた。が、それを下りさえすればよいというものでもなさそうである。わずかに人の行けそうな道を誰かがみつけた。それを下つた。下る途中、街道沿いを走る福知山線の線路を見た。このまま行くと、元のくらがり街道へ出てしまいそうな気配である。

道を尋ねたいが、人影もない。いっそ、降りてしまおうと山道を下つた。

出会いそうにない人影と出会つた。「何と運のいい……。」と思つた。しかし、教えられた道を言われるままに歩くとまたぞろ、ひっかき傷をつくりそうな元の山道に着いてしまつた。孤につままれた体である。

その日は峠を越えることをあきらめた。上立杭へは、民家の電話を借りて呼んだ。タクシーを利用した。

丹波焼は、地味で素朴なやきものである。
どうしても花を欲しいと思うことがある。野の花でよ

いのだ。素焼きの一輪生に、花と瓶が仲違いをしないよう、活けるのが好きである。登り窯で焼いたものであれば、尚良いと思う。

轆轤の技術を誇るか、釉薬を尊ぶか、心を謳うかといふ問題は、作陶する人達と話す機会に恵まれていて、か、話題にすることが多い。結論は出ない。たいていは、物言わぬ窯が答えを一番よく、知っているのではないかというところに落ち着く。はぐらかされたようではあるが、窯の神秘は否定できない。

立杭焼は、今も登り窯で焼いているという。登り窯と土物は、出合いのものという気がする。この丹波の里と、登り窯がまた、よく似合う。

立杭焼の土色と、緑と、路邊の秋草は、心を重くさせない、夏の終りの拾いものだという気がしている。

港と船と錨と

海老原 明美

今まで何度か小木貞孝氏との思い出を書いてきたが、きょうは氏の長編小説の一作を紹介したい。ベンネーム加賀乙彦で書かれた最新の小説で題名は、「錨のない船」(講談社)という。第二次世界大戦の前後、外交官を父に、米人女性を母にもつ健という混血の青年が、いかに生き、いかに死んだかを描いた作品で、ノンフィクションナル・ノベルと呼ぶべきかと思う。(ノンフィクションではない)。モデルは太平洋戦争直前、日米交渉のため特命全権大使としてアメリカに渡った来栖三郎氏の息子さんである。彼は日本陸軍の航空隊少尉であったが、終戦間際に二十代の若さで亡くなつた。

時折り、私はこの小説のことを思い出すが、題名の「錨のない船」から連想されることも多かつた。

ところで今、私は、横浜の山下公園に来ている。山下

公園は海に突出した公園である。十数年前、私はこの公園を訪れたが、その時に受けた、どこか荒涼とした、男っぽい港のイメージはなくなり、明るく美しく、小じんまりとした公園になつてゐる。公園には「赤い靴をはいていた女の子の像」があつたり、レンガの道があつたりする。公園の近くには洒落た高層ホテルやマンションが建並らんでいる。甘い甘い雰囲気は恋人達のデートコースにはもつてこいだが、港につきものの、恋を捨てても、男のロマンに生きようとする男と女の哀しさなど、感じようにもない。

私の生まれ育つた船橋も港の町であつた。神戸や横浜のように外国との繋がりはそう強くないが、家から車で十分もいくと、海と潮風が待ち受けてくれた。私は海が好きである。変に媚びていないところがいい。防波堤から見ると、倉庫が並んでいるのが見えたりする。それが私と、海の向こうを結びつけた原体験なのかもしれない。約四年半前、海の向こうのアメリカ西海岸から海を見たことがあつた。ロサンゼルスからも、サンフランシスコからも、バンクーバーからも太平洋を望んだ。潮のか、結構な数がいた。

香りを嗅いだ。が、不思議と日本を慕う氣にはなれなかつた。日本があるのだなあ…と思ひはしたが、感傷的にはなれなかつた。私には先へ先へと駆り立てられる気持の方が強かつた。大洋の向こう側の私自身の根っここの部分への感傷より、好奇心の方が先立つていた。

私を横浜に連れてきてくれたのは、私の夫になるであろう男^{ひと}である。二十年前、彼はこの港からナホトカへ向かつた。丸々二日を要してナホトカに着き、シベリア鉄道でヨーロッパに入ったといふ。ドイツへ留学したのである。知り合つてからかなりなるのに、都心から三十分で来られる横浜と一緒に来たのは初めてである。彼は彼なりにこの港に対しての思いがあるのだろう。私がその想い出の中に踏み込めるはずもない。

山下公園の桟橋には、氷川丸が錨を下ろしている。氷川丸は「錨のある船」なのだが、どこか、囚われ人を見ているような寂しさを感じてしまつた。氷川丸の中はレストランとホテルになつており、もう一度と大海原に出ることはないのだろうと思われる。

ポートサービスより「あかいくつ号」という遊覧船で

港内外の遊覧をした。四時半の最終便に私達は乗つた。鷗が飛んだり、波に浮かんだりしている。鷗は全体が可愛いらしさを感じなのに、近くに寄つてみると鋭い眼と嘴を持つてゐるのが分つた。どこに巣を作つて卵を孵すのか、結構な数がいた。

「あかいくつコース」は所要時間六十分である。以下のコースの説明を写す。

山下公園→山下ふ頭→内防波堤灯台→横浜航路→本牧ふ頭(公団ふ頭延長一、一二三メートル、繫船能力三五、〇〇〇トン級二隻、二五、〇〇〇トン級二隻のコンテナバース、市営ふ頭延長五、四三五メートル、繫船能力一五、〇〇〇トン級二六隻、二一、〇〇〇トン級一隻、うちコンテナ、バース三バース)→検疫錨地(外国より日本に始めて入港する船舶が検疫を受ける場所)→鶴見航路→日本钢管扇島製品バース東京電力横浜火力発電所(大黒ふ頭(現在建設中の横浜港における最も新しいふ頭です))→大黒大橋(鶴見区大黒町ふ頭を結んでいます)

船のデッキに出て潮風に当たりながら、灰色の海を見た。そして港内の倉庫群や自動車運搬船等、この港から世界中に旅立っていくであろう物たちのことを思つたら、急に旅愁にかられた。やっと横浜港本来の姿を見たような気持ちになった。

「あかいくつ号」は再び山下公園前のポートサービスに戻った。夕闇は深くなり、灯が点々とし出した。私は山下公園を後に、小高い丘の上にある「港の見える丘公園」に行つた。「港の見える丘公園」は思ったより小規模の公園であったが、ここもまたカップルが多かった。連れの人に言わせると、昔はもつと間近に港が見えたのだという。倉庫会社や保険会社がビルを建てたので、ビルの狭間の公園になってしまった。

公園内にレンガ造りの「大仏次郎記念館」があった。この記念館が建つたのは、昭和五三年である。「霧笛」

(大仏次郎作の横浜を舞台にした開化物小説) という洒落た喫茶店が館内にあった。店内のレイアウトも素適で、カップも良いものを使っていた。

「港の見える丘公園」から、元町(神戸と同名の地名

である)を通つて中華街へ行つた。私の見知つているアメリカの中華街とはちょっと趣を異にするが、日本の中においては充分に異国的であつた。フルコースで食べたら、食べ切らなかつた。中華菓子を家族の土産に買った。加賀乙彦氏の「錨のない船」には、何ヶ所か、「船」と「港」という言葉が象徴的に使われている。例えば来島大使(健の父親)は健に向かつてこう言つている。

「お前を日本に残したのは、男の子だからだ。まず日本人として立派に育つてほしかつた。外交官の家族といふのは、外国から外国へと旅をする。まるで錨のない船のようにだ。わたしは、お前にだけはしつかりと日本に錨をおろしてほしかつた。」

また健の母親であるアメリカ女性アリスも同様のことと言つてゐる。

「外交官ノ家トイウノハ錨ノナイ船ノヨウニ国カラヘトアテドモナク漂ツテイキマス。ソノ船ニ乗ツテイル子供ハ、諸々ノ国々ヲ見テイルウチニ、船出シタ港ヲ忘レテシマウノネ。トコロガ人間ニハカナラズ船出シタ港ガアルノデス。ソノ根源ノ港ハ、アナタノヨウナ男ノ子

丸のよう受動的ではなく、能動的に。貴方はどうだろうか?錨はどの港におりてゐるだろか?

横浜の外国人の人口はひと頃よりずっと少なくなつてゐるという。眞のエキゾチズムは消えつつある。神戸はどうなのだろうか?七月に神戸を訪れた時、港を見られなかつたのが、今頃になつて悔やまる。

ノ場合ハトクニ重大ダト、ワタシタチ、ぱぱあトワタシハ考エタ。ダカラアナタヲ敢エテ日本ニ残シタノデス。母トシテワタシハ本当ニ辛カツタ。デモ!」
健は母の祖国アメリカで生まれたが、八歳の時から日本で教育を受け、大和男児として育てられる。アメリカと戦争が始まつた時も、日本人として戦うことを母に誓つた。健は大和魂を持ちながらも、母親似のバタ臭い外見ゆえに、B29撃墜の際に九十九里浜に落下傘で着陸したところを、アメリカ兵と間違われて竹槍で殺されてしまう。

この健のことを思うと、心理学を学んだ私は、どうしても「アイデンティティ」という言葉が浮かんできてしまふ。「帰属意識」と訳すのが良いと思うが、日本人なら日本人としての誇り、自覚のことであり、もつと狭くいうなら、神戸っ子の誇りとか、船橋っ子の心意気といった、その地域への一体感である。自分の根っ子への共感である。ある地へ、「錨」を下ろしているという気持ちである。

私は日本に錨を下ろしてゐるのだろうか?それも氷川

メリケン波止場（上）

神戸観光汽船船長 角本稔

「メリケン波止場のイメージ？」

残念ながらあらへん

少し前まで、メリケン波止場にガス灯があつたし、古い建物も多かつたけど

どんどん新しくなつていきよるわ

そうそう昔の正月はメリケン波止場あたりいつぱいに止まつとつた、ハシケ、タグボート、ランチなど

が元日の午前零時になると一斉に汽笛をならしたものや」

これは四年前取材で東京から訪れた旅行雑誌のレポーターに私が歩きながら何げなく語った言葉が、その雑誌の「神戸港特集」のタイトルとして載せられたもの一部である。

私は当時で十八年間この波止場に勤務していた。波止

場を歩きながら、昔の方があつとメリケン波止場らしいムードが有つたのにと、無意識の内に口から出たのである。

あれからさらに四年が経過した。かねてからの計画であつた「メリケンパーク」が市民の期待を受けいよいよ実現の運びとなり、今年度末より着工されるが、付近一帯大きく様子を変えることとなつた。

最近のアンケート調査で「神戸港と聞いてまずどこが頭に浮びますか」との質問に神戸っ子は決まってトップに「メリケン波止場」と答えるらしく、市民の親しみが込められているし、市外の人々からも港の代表的施設かつ名勝地としてのイメージが強いようである。

だが神戸市民でもその場所がどこであるかを正確に知らず西側の中突堤と混同しているようである。旅行者も時折り波止場間違いがある。

ここでその波止場の場所について触れて見よう。かつて住居表示は「生田区波止場町メリケン波止場」であった。これが昭和五十五年十一月一日より生田区、葺合区が合併となり中央区が誕生した。その際に「メリケン波止



海岸通と外国人居留地跡に建つ海運会社ビル
(現在中間に歩道橋がある)

場」が削除され「中央区波止場町三」のみとなつた。

さて波止場への道は、元町駅（国鉄、阪神電車）の東口を出て浜側（南側）へ歩くと元町一番街である。大丸神戸店を左に見、中華街の南京町を右に見てさらに進む。付近の街路樹はアメリカハナミズキ（米国から贈られたもの）が植えられ、海へ至る道は「メリケンロード」と名付けられている。海岸通りにはロココ調（フランスのルイ十五世時代の装飾様式）で石造りの海運会社のビルが建ち並び、さらに臨港線の踏切りを渡るとそこから「メリケン波止場」が始まる。しかし前方に阪神高速の神戸、西の宮線が通つてるのでややもすれば波止場の風情は薄れがちであろう。

入口の石柱に「萬國波止場」と刻んだ古いプレートが目につく。これはこの波止場の歴史の一端を物語るものだ。先の大戦で外来語がことごとく「敵性語」として使用禁止された。当然敵であるアメリカを示す「メリケン」は憎さもにくしと真っ先に消され苦肉の策として「萬國」と改名されたのである。しかし戦争も終りアメリカ軍が進駐して来た際に、元の「メリケン波止場」の名称に戻

された。市民から親しみを持つて呼ばれ続け現在に至っているのである。

さらに波止場の歴史を紐解けば明治の神戸開港までさかのばらねばならないのである。

寛政四年（一七九二年）ロシアのラクスマンが根室へ、続いて嘉永六年（一八五三年）アメリカの東インド艦隊の司令長官ペリー率いる黒船が来航以来、鎖国をしていた江戸幕府に次々とイギリス、フランス、オランダが開港、通商を迫り、安政六年（一八五五年）にやむなく函館、長崎、神奈川（現在の横浜）が開港した。

各国は大坂開市や兵庫開港も矢のように幕府に迫った。しかし余りにも京都御所に近い理由から二転三転し出来るだけ時期を遅らせたのであった。その間国内の尊皇攘夷論は至烈を極め血で血を洗うことも幾度か起つた。天皇は孝明天皇が亡くなり明治天皇へ、幕府は將軍家茂が急病で死亡、十五代將軍慶喜の時代へと移つたのである。時代の流れを悟つた慶喜は朝廷へ上申を度々行つた。糸余曲折の末大阪開市、兵庫開港を見たのであった。幕府と諸大名、加えて外国勢力と朝廷を押す薩摩、土佐、

開港式にはイギリス艦隊十二隻、アメリカ艦隊六隻があつたと言えるのではなかろうか。

慶應三年十二月三日（一八六八年）明治元年に兵庫の津は外国に開港した。先の三港に遅れること十三年である。時を同じくして太政奉還が行われ文字通り新生日本の夜明けであった。

この時より本格的に外国人の手により港の築造が始められたのであるが、兵庫の地には昔からの住宅や倉庫が密集し買収するにも相当な費用がかさむ。それで新しい船着場や外国人居留地は兵庫人の敬遠した未開の旧生田川尻に指定した。

この旧生田川や鯉川は雨でしばしば氾濫し川尻地帯は沼地に近い状態で住民からはほとんど手付かずの地であった。これを優れた建築技術の持ち主である欧米人が日

が聞けばまた違つた波止場名になり得るのでは…。

横浜港ではフランス山の浜にはフランス波止場がある。それに対応する波止場もイメージ的にはかの地の方が強いのであり、「別かのブルース」に歌われている波止場も事実横浜の「メリケン波止場」である。大佛次郎の「横浜今昔物語」にも記載され、港の人々からも呼ばれていたこの波止場はどうやら現在外航客船が着き、タグボートが基地にしている「大桟橋」のようだ。明治十九年に「東波止場（長さ七三〇m、幅一〇m）」が造られ序々に延長、大正六年十二月一日に大桟橋として完成している。その横に大正十一年九月一日に関東大震災が襲い、そのガレキを埋めて造つたのがその脇にある有名な山下公園なのである。

現在の横子や横浜港湾局に尋ねても「どうも昔は大桟橋をメリケン波止場と呼んでいたようだが、いつの頃からか呼ばれなくなつた。それがいつだか分からない」との答えでどうも定かでない。であるので現在我が国に残る「メリケン波止場」は神戸唯一つ。

この固有名詞が先の住居変更で取り扱われ单なる波止

場町とされたので少なからず残念ではあるが、神戸税関や海運官庁、港の人々、市民からは今もなお親しみを込め「メリケン波止場」と呼んでいるので救われる気がする。

開港以来百十五年の歴史を見つめるこの波止場も、明治四十年～大正八年の神戸港第一期修築工事、大正八年～昭和十二年の第二期修築工事等の対称ともなり沖止まり船の増加と共に次第に増築され、現在では長さ二百十七m、幅六十八mであり通船（ランチ）、港めぐり観光船、タグボート等四十五隻、機動バシケ二十五隻の基地である。

つづく

（参考文献 神戸港一五〇〇年）



旧式のスタイルでつきのように対戦していたという。

投手はスイフトを唯一の武器とし、取手はバウンドキャッチにして、第二塁のアウトなどは夢想だもせざるところなりき。「ストライキボール」は分ちて高・中・下の三どし、眼より乳に至るを高球とし、乳より腰に至るを「フェーア」とし、腰より膝に至るを下球とし、打手は自己の望むところを判定者に通ずれば、判定者は高くこれを球場に告知し、要求外の投球はことごとく無効とせり。当時は「ナインボールス」なしも、ストライクの限界短縮なりしが故に却つて現時の規定よりも労せしならんか。

と、投手はあまり重要視されていなかつたようで、打者の打球の処理が勝敗を決する要因であつた。ところが明治23年になり、東都野球界に一大刷新がなされ、投手も捕手も進歩した。捕手がダイレクトキャッチをし、打球の捕球がアウトとなり、3ストライクが採用され、わかに投手が脚光を浴びることになる。神戸における曲球の創始もこのアメリカの新規則の普及によつて次の

この曲球を説明する前に明治20年頃の投球について述べておこう。第一高等学校校友会野球部が編集した「野球部史」によると、平岡熙が率いる新橋俱楽部のみがアメリカの新規則を使用し、他の学生チームは以前として

この曲球を説明する前に明治20年頃の投球について述べておこう。第一高等学校校友会野球部が編集した「野球部史」によると、平岡熙が率いる新橋俱楽部のみがアメリカの新規則を使用し、他の学生チームは以前として

「関西学院学生会抄史」に「前部長烟鉄三氏松山中学より転校されて初めて曲球を神戸にもたらされた」とある。烟は明治32年普通学部普通科を卒業しており、のちに同院の英語担当の教授となり野球部長もした人で、松山中のアメリカ人教師からカーブの投球を学んだという。この学校の乾精未と三木虎雄もカーブを投げたが、中村賢二郎の「母校通信」、「母校今昔物語」にはこれが問題となり永井柳太郎が「カーブ不可の論」を主張したという。

当時カーブ・ピッチングはなかつた。しかるにこれが流行してきた。学生大会にこの曲球採用の可否について論議を戦はし、永井君は真正面よりこれに反対した。曰く、母校は初の御名によつてたてられ、正義公道を訓ゆる学校である。かかる学校に於て曲球を投じつ敵をなやまし、以て勝利をえんとするが如きは、日本武士道に反するのみならず、十字架のキリストを忘れたものである。と彼の雄弁は衆を圧し反対するものはなかつた。……

関学スポーツ史を研究している米田満氏も「中村賢二郎も人一倍謹厳な方で、相手に打たせないよう投げる」というのは卑法だ、堂々と真正面に投げて打たしたらいといつて、永井と共に曲球反対派の双壁であつた」と書いている。野球の関係者以外から曲球反対論が出るとことであつたが、県商・師範に台頭する中学校としのぎをけずつて対戦していた当の乾精未は「どこの学校でもやつてゐるのに今さら何を云う」と一笑に附しまウンドに立つてカーブを投げていたという。

神戸商業学校

同校を明治34年に卒業した武文彦はまれに見るスポーツマンで、同33年舞子の浜で開催された神戸連合端艇競漕会に三番を漕いで優勝し、有栖川宮の御染筆である「凌波旗」を獲得している。この武が兵庫倶楽部に入会し野球をやつたが、神戸居留遊園地の神戸クリケットクラブ（KCC）員の外国人が投げる球を見て変化球を研究していた。ある日学校の机の上でボールを転がしていって、ひねり具合でボールが曲がることを発見、さっそく

ピッチングでためしてみるとボールがカーブした。この

ことを武文彦は、同校の「会報・県商創立90年記念同窓大会特集」で

明治30年に入學してその翌年の31年の時に野球のピッチャーハンとして出ておりましたが、2年間の研究で私はカーブの投球を得て大いに相手をやつつけました。兵庫クラブ（県商）と神戸クラブ（関学・一中）がマッチをやりました時に、私のカーブの投球に相手は手が出ず、こちらは32点という大量得点でやつきました。それから私の出場を嫌がりまして試合をしないなどケチを付け出したので、私は憤慨して脱退してしまいました。

武はその頃カーブとドロップを使つていたそうで、それが相手チームに恐れられ試合をするチームがなくなつてクラブを脱退したと回顧している。ところが色々と資料を見ても兵庫対神戸戦で32点対いくらという試合が確認できない。武が1年生であつた明治30年10月に県商対中学の試合で27対8で商業の勝つた試合があるが、この時武は三塁手であつた。

日本におけるカーブのバイオニア 佐々木勝磨のいうようにはたしてカーブのバイオニアは神戸であつたのであろうが。先にのべた新橋倶楽部

の平岡熙が、打者の要求する処へ投げて打たせる方法が一般的に採用されていた時に、時々カーブを投げ打者を眩惑させている。工部大学の岩岡保作がこの平岡に執拗に迫つて遂にカーブの原理を聞き出し、アウトとインの二つのカーブを案出。更に福島金馬（一高）に至つて一心完成されている。福島金馬がカーブを投げ溜池俱楽部に32対6で大勝したのは明治32年11月23日、本郷台のグラウンドで次のような勝ち振りであつた。

福島投手が数年来心血を注いで研究した彼のカーブは、或いは速く或いはのろく或いは右に或いは左に、

自由に曲つてとても打てない。ブレートの下に泰然として智謙千里に馳する彼の境地は一高生の声援となり、沸き立つ様な拍手がその一球ごとに起る。

とほとんど奇跡に近い大勝利が福島のカーブによつて実現した。のちに九州大学工学部の教授となつた岩岡保作が平岡から教わつたカーブは「ボールを半分摑んで投げる」のであつた。そうさえすれば球はアウトショートするので打者は一寸面に喰う。これが即ち球道の秘法」であつたが、福島金馬に伝わったときは「親指をボールの

縫い目にあて、他の一方に2本の指を添えてサイドスロー投げる」のであるが、そのボールを手放す折、一寸ひかれるのであつた。そしてカーブの曲り方は相当大きくなつた。この投法を各チームの投手達が見よう見まねでまねて、誰れもがカーブを投げるようになつていだという。それからしばらくしてアップするようなインカーブも投げられるようになり、アウトカーブと共に盛んに使用された。一高が対外人チームに勝つ時の投手青井鉄男の略評しためずらしい資料がみつかつた。

氏の投げ方は是れ実に其専門術にして他人の得て撲効すべき所にあらず、氏野州宇都宮に人となり、幼にして石投に長じ、常に数町の長きに達し今八町の変称を得たりき。実に氏の熱球はその天性に受け所にして、所謂るその捻球八手の術は半ば之を福島金馬氏に受け、半ば之を自の研究より得たり、昨夏の激戦に於てはその独術を以つて大に外人の肝胆を奪い、取手藤野氏と共に噴々の名ありき。氏の打撃力は一般に猛烈なり、馳突力（ランニング）は大

胆を以つて鳴る。然れども時に無謀の挙あり。

での秘術は左腕の守山恒太郎に引き継がれ、一高の黄金時代を投げぬくのであつた。

ぶつく・えんど

* * *

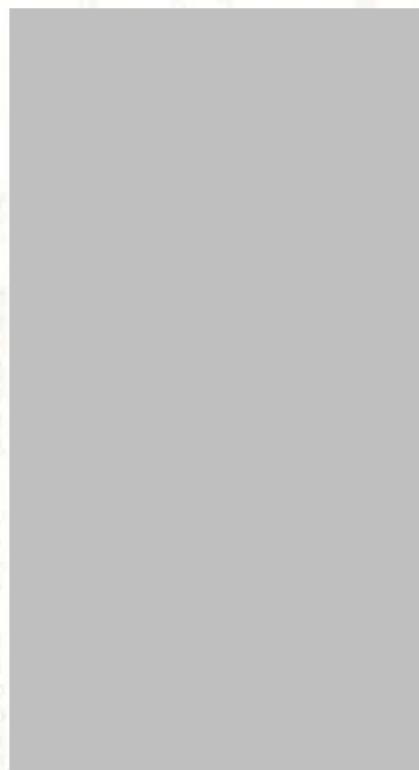
みにしている。(十月二十九日付読売新聞)

盲人にまた新しい朗報が届いた。文字と点字を同時に打つことができる、世界でも初めてのタイプライターが開発されたのだ。このタイプライターは、新技術開発事業団が日本電通に委託して開発を進めてきた「カナ文字・点字同時印字タイプライター」と呼ばれるもので、目の不自由な人の役に立つだけでなく、点字を知らない晴眼者でも簡単に点字を打つことができるなど、幅広いメリットが期待できそうだ、という。マイコン制御なので、

カナ、点字のどちらか一方だけを打つこともでき、さらにそれをもう一方に翻訳することもできる。印字速度も通常で毎秒六文字(点字)と普通のカナ文字タイプと変わらない。キーボードは、標準カナタイプ配列とほぼ同じで、目の不自由な人でも配列さえ覚えれば簡単に操作できる。このタイプライターは、キーボードを変えれば英語や仏独伊などの外国語用にも応用可能という。このタイプは盲人に架ける橋になるかも知れぬ、と僕は楽しむことだろう。

このミスティリーが、ホーム・コンピュータから印刷物として打ち出されるのには十六分間を要するが、この購売料は利用時間帯によって異なり夕方ならしめて二ドル三セント(約五百円)。昼間は約三倍という。」

この仕組みは、今後本に代わるメディアとして関心を集めることになるだろうし、出版業界でも注目する事象となることだろう。



アメリカで世界初のパソコン小説が完成。読者へ配信されたというニュースが十二月六日の夕刊読売新聞に出た。記事をそのままここに写すことにする。印刷文化を売る本屋にとつても大いに興味のあるニュースだ。

「ワシントン郊外の、ニュー・メディア、情報産業、ソース・テレコンピューティング社は四日、パソコンで執筆され、同社の情報サービス回線を通じ、契約者のホーム・コンピュータに打ち出される世界初の、エレクトロニック小説『盲目のファラオ』を配信したと発表した。

総語数二万語の推理小説『盲目のファラオ』を執筆したのは、トロント在住の作家バーク・キャンベル氏。同氏は三日間計六十一時間半、パソコンにかかりきりで、この新作を完成した。

トロントからワシントン郊外、米バージニア州マクリーンのソース社に送信された十九章立ての新作は、わずか三時間の編集作業で、商品化を終え、その日のうちに情報サービスに組み込まれた。

郷土誌の窓

実におびただしい新聞のスクラップを目の前にして、どちら手をつけていこうかと悩んでいる。研究書も文書も情報誌も個人や社会の記録も生活する人間のレベルからは軽重の差はない。アトランダムにできるだけ沢山紹介していくことにしよう。

* * *

もう一ヶ月以上にもなる、十月八日付の神戸新聞に在神外国人向けに生活情報を英語で案内した「リビング・イン・コウベ」(B5判・二〇六ページ・二五〇〇円)が発行された、との記事が見えている。記事によると、この本には病院からショッピング、交通機関など日常生活に欠かせない情報が満載。緊急時の電話番号や、よく使われる漢字の説明、数字の読み方などのほか、病院の地図、幼稚園や学校案内、外人クラブ、教会の連絡先も入っている。この本は「ウェルカム・ツー・コウベ」という名で五十一年に神戸のユニオン教会のメンバーの手

で発行されたのが最初で、以来三度の改訂を加え内容も充実。「情報は毎年変わっていくので、来年は改訂版を出す計画」とのこと。お問い合わせは、神戸市中央区生田町四、コミュニティ・ハウス・アンド・インフォメーション・センター(略称CHIC)まで。

ちなみに、兵庫県に在住する外国人は八五ヵ国、八万人以上。その半数近くが神戸で生活をしています。

* * *

十月の二日に、神戸出身のキリスト教社会運動家・賀川豊彦の遺品や資料を集めた「賀川豊彦記念・松沢資料館」がオープンした。場所は東京都世田谷区上北沢三。松沢教会の隣で、昭和三十五年に七十二歳で世を去るまで住んだ自宅を取り壊して建てられたもの。賀川記念館としては神戸市中央区吾妻通や東京・本所にもあるが、研究者のための資料を保存、展示し広く提供しようという施設はこの資料館が初めて。ここに集められた資料は、賀川豊彦が自宅に置いていたものがほとんどだが、各地からの寄贈、明治学院大学所有の蔵書も含まれ、著書や蔵書のほか、自筆ノート、写真、聖書や万年筆などの遺

品と豊富で、総数約三万八千点に及んでいる。(十月三日
日付神戸新聞)

* * *

阪急電鉄が明治四十年十月に箕面有馬電気軌道会社として設立されてから七十五周年になるのを記念して総工費四億円をかけ「阪急学園池田文庫(図書館)」が増改築される。この文庫は、阪急の創立者の故小林一三氏の蔵書と宝塚文芸図書館の蔵書で昭和二十四年にスタートし、現在の蔵書数は約九万冊。一般にも開放されていて、特に演劇関係の研究者の人気を集めている文庫。「早稲田演劇博物館」の「東の演博」に対して「西の演博」と呼ばれている。工事は来年七月末までの予定で、完成後は演劇研究者のメッカになりそうだ、という。所在地は池田市栄本町。 (十月六日付神戸新聞)

* * *

神戸史談会まで。

(十一月六日付朝日新聞)

* * *

この秋は不思議な秋で、庶民の暮らしの方は不況でさっぱりなのに、文化的な事項には事欠かない。博物館や美術館のオープンが目白押しの状態だった。前号で書いた、兵庫県立歴史博物館のこと(開館は来年四月)、さらには書きそびれてしまつたが、十一月三日には神戸市立博物館が華やかにオープンした。開館記念特別展の「海のシルク・ロード展」は新聞各紙で大きくとりあげられ、注目を浴びたことは記憶にあたりらしい。

もう一つ、見のがせない美術館が十一月十八日にオープンしている。神戸の異人館街の一角にオープンした「ペルシア美術館」だ。同館は、神戸市の伝統的建造物指定を受けている異人館の内部を改装して、二百点余り織物、陶器、金工芸品などペルシア古美術品を展示。展

示品は、いざれも「愚樂自榮」の日本名を持つ芦屋市在住のアメリカ人、グラック館長が三十年がかりで集めた約千点の一部。まさに神戸ならではの美術館だ。同館の所在地は、中央区北野町 [] 年中無休で、開館時間は午前十時一午後五時。入館料は一般三百円、小学生以下百五十円。

* * *

明石在住の漫画家・伊藤太一さんが明石と近郊の風物、社寺、町並み、遺跡などをペン画で描いた『海峡のまち・明石の絵本』(二二〇〇円)が出版された。発行所は明石市芸術文化センターでA5判、百三十四ページ。見開きで左のページに絵、右側に伊藤さんの感想文が添えてあり、散歩などのガイドブックとしても楽しい。市内の書店と明石文化センターで販売。(十一月二十一日付

読売新聞)

* * *

港湾荷役の「上組」を近代企業に育てるために生涯をかけた人物・村尾市松の一代を記した『追憶の村尾市松』(非売品)が出版された。村尾市松は、郷土の若者

(十月二十六日付神戸新聞)
* * *
江戸時代から明治維新まで三田藩三万六千石を治めた九鬼氏十三代の歴史をまとめた『摂津三田藩史』が刊行された。編集したのは三田市本町六八、生鮮食料品店経営高田忠義さんで、忙しい仕事の合間をぬつて七年がかりで集めた資料をもとにまとめたもの。本はA5判、八〇円で当店にて販売中。

* * *

明石市で最近、二つのタウン誌が創刊され人気をあつめている。ひとつは「あかいし」。もうひとつは「サンガ」。

「あかいし」は明石市芸術文化センター(明石市相生町 [] 電話 [])の定期刊行誌としてスタート。
「サンガ」はサンガ編集局(明石市大蔵町 [] 電話 [])が発刊したもので、青年と若い心をもつた人たちの文集として歩み始めた。

「あかいし」は作家の谷村礼三郎さんを編集長にして明石ベンクラブの人たちが協力。二十人前後が寄稿し、ほかにも「言いたい放題」の欄を設けて多くの市民が参加。変型A5判、三十四ページ。第二集は「明石の文

二百三十ページ、四部構成で、寛永十年(一六三三)鳥羽から三田へ所替えとなつた九鬼氏初代の久隆から維新的十三代隆義までの世相を年代を追つてわかりやすく編集。古地図、藩札の写しも取り入れ、また、庶民層の暮らしを盛りこんで、江戸期三田の「庶民史」として貴重な一冊となつてゐる。お問い合わせは前記高田さんまで。(十一月十一日付読売新聞)

* * *

須磨区内の主婦を中心としたグループ「ひろばの会」が中古バスを購入して「バス図書館」を開設した。十一月六日に蔵書三〇〇〇冊でオープン。十一月六日の読売新聞によると、このグループは、地域に子供の遊び場がなく、市に公園造成を働きかける目的で昭和四十八年に結成された。市の公園計画が進まず、道路で遊ぶ子供たちを見かねて、四十九年に「せめて本でも」と会員の位置にミニ図書館「ひろば文庫」を開いて各家庭から本を持ち寄った。その後、五十三年には空き家になつていた川崎重工社員寮を借りて、十五畳の洋間に図書館を移動。一世帯月百円の文庫用会費や会資金で本を購入して充実

を国際人に育てるため自己所有株を寄付して育英会創設を公表した直後の昭和四十七年に死去。本は市松の友人、先輩、家族らによる二つの座談会と、上組の発表を背景とした市松の一代記とで構成。村尾育英会は、神戸市中央区中山手通 [] (電話 [])。

化」がテーマで、伊藤太一さんのマップがついている。

第一集は五千部、第二集からは三千部ずつ発行。年間六冊発行で一冊二百五十円。

「サンガ」はサンスクリット語の「群衆」「集団」という意味。二千部を発行。会員配布のほか、二百三十円で販売。(十一月十一日付朝日新聞)

* * *

神戸史学会の会誌「歴史と神戸」(一一五号)が届いた。今回の特集は「播磨特集(三)」。論文名を紹介することにしよう。

播磨史の基本性格 石田 善人
文安年間における播磨の海運 今里 幾次
播磨の後藤氏 松本多喜雄
「播磨国風土記」研究文献一覧 岩坂純一郎
広峯神社関係文献目録 福野 敏博
ひょうご芸術文化センターが刊行している雑誌「発言」の第三号がこのほど発行された。特集は「マンガ・ディスコ・メカトロニクス時代」で、「現代のライフ・

スタイルが意味するもの」(山口光朔)、「まんがから見た学校教育」(津村喬)が収録されている。ハわたしの自分史」は涌井安太郎さんの「生協運動にたどりつくまで」。他に、教職員の生活記録、小説、詩、短歌、俳句など教育を軸にした幅広い雑誌をめざしている。八〇〇円。当店にて販売中。

* * *

神戸都市問題研究所が発行している「神戸の歴史」(第七号)が十月に届いた。編集は新修神戸市史編集室の手による。口絵には明治十四年と三十八年の引札(ひきふだ)が二葉入っている。収録されている論文は次の通り。
産業資本確立期における神戸築港問題 内海 孝
'和田山訴訟顛末記' 庄屋三郎左衛門の記録から 木南 弘
'神戸市警'始末記 草山 巖
続神戸市長物語(一) 阿部 環
これらの論文のほかに、「文献紹介」として『明石郡役所事績綱要』『兵庫県有馬郡八多村農事調査報告』

『神戸市長物語』『炎は消えず賀川豊彦再発見』が收められている。定価三〇〇円。当店にて販売中。

* * *
関西新空港をめぐる「神戸沖案」と「泉州沖案」の対立は今も水面下で続いているようだが、市民にはわかりにくい。「神戸沖案はいったい何を意味するのか」を視座にすえて十月に一冊の本が出版された。『嵐の中の関西新空港』(ライフ社刊・一〇〇〇円)がその本。副題は「運輸省も困ったヤブから棒の神戸沖案」となっている。空港を考えるために材料を提供してくれているこの本が広く読まれることを望みたい。

* * *
『神戸新聞出版センター』の「兵庫ふるさと散歩シリーズ」が久しぶりに発行された。『西宮文学風土記』(上／下・各八二〇円)と『北神戸の山やま』(八八〇円)だ。『西宮文学風土記』は南野武衛さんの著で地域毎に文学作品を援用して紹介したもの。『北神戸の山やま』は神戸の北部に連なる山々をガイドしたものだ。

海文堂に入社して間もなく「兵庫の同人誌」という企画の中で「時の川柳」誌とも三條さんともお会いした。三條さんは元町生まれ。もの静かで温いお人柄だが鋭い批判精神の持ち主でもある。『川柳全集第十四集・三條東洋樹』は一五〇〇円。

土鉢を集めて五十年、写真による作品集『土鉢』(四十六ページ、二百部)を出した人がある。十一月九日の神戸新聞に記事がでている。この人は神戸市東灘区御影

中町 [] の川西 [] さん。記事によると、川西さんの土鉢作りは十年で、それを機会に作品約三百点を写真で紹介した作品集を出した。集めた点数は数千点にのぼるという。自宅近くでは土鉢教室を開いている。また来年一月には八回目の個展を大阪で予定している。興味のある方は直接、前記川西さん宅まで。

* * *

戦争を記録した本が次々と刊行されているのだが、もう紙数がなくなってしまった。次の機会にゆずることにして、最後に『酒場の絵本』を紹介してこの欄をおくことにしよう。この本は、神戸港振興協会の田中正樹さんの文と成田徹さんの切絵で構成。神戸のグッド・バーのガイドブックだ。一般のガイドブックと違つて冗舌でないところが好ましい。案内されているバーは十六軒。切絵のトーンがよく雰囲気を伝えている。発行部数は一五〇部というから、この号が出る頃には売り切れているかも知れない。どうかその節はご容謝ください。

(N)



海文堂案内版

海文堂書店は十二月十五日、新装二年目をむかえます。

新しい年、一九八三年。海文堂は読者へのサービスを目指して、工夫を凝らしながら歩んでいこうと考えています。『元町の船のマークの本屋』として、読者から愛される店になるよう努力してまいります。変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申しあげます。

★ 法律書ゾーンの平台では『氣くばりのすすめ』など、博覧強記で知られる鈴木健二さんの本を集めて展示しています。一月末までの予定です。

★ 一階の新刊コーナーでは、NHKの大河ドラマ「徳川家康」の関連書をあつめたブックフェアを開催中です。こちらも一月の下旬まで開催いたします。

★ 文庫ゾーンでは「ワイワイ・ドキドキ サスペンス フェア」をただいま開催中。サスペンスの名作をボリュームたっぷりに揃えました。一月中旬まで展示しています。

また、十二月下旬から一月二十日まで富士見書房の「ロマン文庫フェア」を開催いたします。

★ 実用書ゾーンでは、現代書林が発行している健康の本を一月いっぱい展示する予定です。

★ ヘブックプラザでは、出版社別ブックフェアの第六回、恒文社の刊行図書を展示いたします。恒文社はスポーツ図書の出版社としてよく知られていますが、今回は東欧関係の出版物を紹介するのがネライです。案外、恒文社の東欧の本は知られていないようで、是非この機会に店頭でご覧ください。一月三日から十五日までの予定です。

その後、一月十六日から一月末日まで社会思想社の「現代教養文庫」のブックフェアを開催いたします。この文庫の中には他の文庫にない瞠目させられる書目が沢山あります。約五〇〇点を展示する予定です。

ご期待ください。

★ 二階ギャラリーでは、十二月二十七日から一月九日まで「此木三男の世界展」を開催いたします。

★ 海文堂書店・本店は一月一日と二日の両日休業させ

ていただきます。なお、メトロ神戸店は営業しております。

「おはようございます」とおもてなしの言葉で、お出での方を喜んでお迎えする

お手伝いさんたちが、お出での方のことをよくお聞きになつて、お出での方の

お好みに合わせたお手伝いをして下さる、それが、お出での方にとって、とても

安心感のあるお手伝いさんたちです。お出での方のことをよくお聞きになつて、

お好みに合わせたお手伝いをして下さる、それが、お出での方にとって、とても

アーティスト案内